

研究報告

在宅認知症高齢者の家族介護者の介護経験を通した気づき

松 本 啓 子¹⁾, 名 越 恵 美²⁾

¹⁾川崎医療福祉大学, ²⁾福山平成大学

要 旨 在宅認知症高齢者の家族介護者は、介護するうえでさまざまな経験をしながら介護を継続している。その現場で起こっている現象に着目した報告は、未だ嚆矢の段階といえる。そこで、認知症高齢者を抱える家族の介護経験を通した気づきを明らかにするために、質的因子探索的に分析を行った。「認知症の人と家族の会 A 県支部」会員の家族介護者70人から半構成的質問紙に対して回答が得られた。その結果、【制度の活用と課題】【患者の交流の場拡充の必要性】【認知症の啓蒙活動充実の必要性】【認知症や介護制度に対する自分の知識不足】【金銭的負担の大きさ】【周囲の協力の必要性】の6カテゴリーを抽出した。家族介護者の気づきを分析し考察した結果、満足して介護制度を活用している半面、制度の課題についても、気づきを持っていた。また、自己の知識不足も含めて社会の理解の重要性も必要であると感じていた。さらに、認知症の本人の交流の場などの充実が重要であるとも気付いていた。やはり、介護は経済的にも負担が大きいが、周囲に理解してもらい協力を得ることが大切であるということに気付いていた。

キーワード：認知症高齢者、在宅、家族介護者、気づき

はじめに

長寿国日本では、人生における老後の時間が昔とは比べものにならないほど長くなった。今後、さらなる人口の高齢化の進展に伴い、65歳以上の認知症高齢者は、現在の150万人程度（65歳以上の人の7%前後）から増加していくことが予測され、2020年代には300万人を超え、65歳以上の約10%に達すると推計されている¹⁾。認知症の根治療法や特効薬は未だ開発途上である。認知症の方の尊厳を守り、その心の世界を尊重するための認知症ケアが世界中で研究されており、一人ひとりに適したケアをすることの大切さが問われている。そのためには、認知症高齢者を抱える家族が、日々さまざまな経験をしながら介護を続けるなかで、その経験を通してどのようなことに気付いているのかを知ることが大切だと考えた。

家族介護者の気づきを明らかにすることは、今後の在宅認知症高齢者のケアの方向性を考える上で参考になり、家族看護の質の向上に資すると思われる。

わが国の研究の動向として、「高齢者」をキーワードにして、医学中央雑誌で原著論文に限定し検索すると、過去5年間で4万件近くにも上る論文がある。その中で「認知症高齢者」に関するものは1,043件であり、さらに「認知症高齢者」「家族看護」に絞ると26件という論文数であった。

在宅認知症高齢者の家族介護者に関する研究は、1970年代後半より、障害老人の介護者を対象として、評価尺度化や影響を与える要因との関連等、数多くの介護に関する検討が行われてきている²⁻⁴⁾。しかし、日本のみならず、欧米諸国においても、在宅認知症高齢者の家族介護者の気づきに着目した上での、系統的な研究はほとんど見当たらない。そこで、本研究では、在宅認知症高齢者の家族介護者の介護経験を通した気づきを明らかにするために、質的因子探索的に分析をすることとした。

2010年8月5日受付

2010年10月8日受理

別刷請求先：松本啓子, 〒701-0193 岡山県倉敷市松島288

川崎医療福祉大学・保健看護学科

研究目的

在宅認知症高齢者の家族介護者の介護経験を通した気づきを明らかにすることを目的とした。

研究方法

1. 研究対象者及びデータ収集方法

「認知症の人と家族の会 A 県支部」(以下家族の会とする) 会員の家族介護者を対象者とした。家族の会 A 県支部事務局長に依頼して半構成的質問紙を配布した。その質問紙に対して70人の「家族の会」会員である家族介護者より回答が得られた。

2. 質問内容

自記式による半構成的質問紙の内容は「介護する中で気付いたことを書いてください」であった。

3. 用語の定義

本研究では、気づきをこれまで知らなかったことや考えたことのなかったことについて、経験することによって初めてはっきりと認識できた内容と定義する。

4. 調査期間

平成18年12月から平成19年2月。

5. 倫理的配慮

対象者に調査を開始する際に、研究協力の自由性及び匿名性、プライバシーの保護、研究結果については、該当する看護系学会や看護系学会誌にて発表の旨等に関する説明について書面による説明を十分行った。質問紙の返送によって研究協力の承諾を示すこととした。なお、質問紙は、厳封した状態での回収とした。

6. 分析方法

介護経験を通した、気づきに関する調査の回答内容については、K. krippendorff⁵⁾(1980) の内容分析の手法を参考にして類型化を進めた。コード化、サブカテゴリー化を行い、以下のように抽象度の高いカテゴリーとなるよう修正を繰り返し生成した。

1) アンケート調査の回答内容から、気づきと判断されるデータを抜き出し、2つ以上の意味を含まないようにデータを区切り、生データとした。

- 2) 1次コード化として、生データを一文一意味で成り立つ文章にした。
- 3) 2次コード化として、1次コードの抽象度を上げた。
- 4) 3次コード化としては、意味や表現が同じコードを1つのまとまりとし、データの文脈に立ち戻りながらまとまりを比較して、類型化を行った。
- 5) 4次コード化として、3次コードを内容別に比較し、それぞれ類型化を行った。
- 6) サブカテゴリー化として、データの文脈に立ち戻り意味を確認しながらコードをまとめた。
- 7) カテゴリー化として、サブカテゴリーを内容ごとに類型化し、抽象度のレベルを揃えネーミングした。
7. 真実性の確保

カテゴリー化のプロセスにおいては、定期的に看護学及び質的研究の専門家によるスーパーバイズを受けた。

結 果

1. 研究対象者の概要

1) 研究対象者(表1)

対象者の年齢は、27歳から89歳であり、平均年齢は64歳(標準偏差10.88)、性別は男性17人、女性53人、計70人であった。

表1 研究対象者の概要

人数	70人
性別	男性 17人 女性 53人
平均年齢	64歳 (SD†=10.88) (範囲 27歳-89歳)

† 標準偏差

2. 介護経験を通しての気づきについて

以下のカテゴリーは【 】、サブカテゴリーは『 』、生データは「 」で記載する。

総数84コードから、17サブカテゴリーと6カテゴリー【制度の活用と課題】【患者の交流の場拡充の必要性】【認知症の啓蒙活動充実の必要性】【認知症や介護制度に対する自分の知識不足】【金銭的負担の大きさ】【周囲の協力の必要性】が抽出された(表2)。

【制度の活用と課題】では、「介護保険助かっています」「今は施設で贅沢させてもらいすぎだと勿体無く思う」や「組織や制度は充実しているように見える」等、

表2 家族介護者の気付き

サブカテゴリー	カテゴリー
介護保険はありがたく助かる 認知症高齢者支援施策を図ってほしい 制度には明るい展望を感じない 介護保険制度の充実をして欲しい	制度の活用と課題
患者が訓練できる場が欲しい 患者交流できる場が欲しい	患者の交流の場拡充の必要性
認知症理解への啓発が必要 地区で認知症の勉強会を開いて欲しい 学校での認知症教育の必要性	認知症の啓蒙活動充実の必要性
知識不足を反省している 認知症介護が始まる前から知識は必要 制度がわからないので勉強したい	認知症や介護制度に対する自分の知識不足
経済的に厳しく将来が不安 サービスの利用料金が安い 施設利用料金を安くして欲しい	金銭的負担大きさ
周囲の人の協力を感謝している 他者とのコミュニケーションが必要	周囲の協力の必要性

という生データより、サブカテゴリーとして『介護保険はありがたく助かる』が抽出された。また、「策が早く出て来るように国をあげて取り組んでほしい」や「政治も大変ですが私も高齢で安心のできる政治を作って行ってほしいと思います」等、という生データより、サブカテゴリーとして『認知症高齢者支援対策を図って欲しい』が抽出された。また、「介護、医療制度とも、高齢者に明るい展望は感じられず、不安は増す」「税、介護…もろもろの面で、仕切りなおしは、不可能なことは、言うに及ばずただただ、福祉の向上を祈ります。」等、という生データより、サブカテゴリーとして『制度には明るい展望を感じない』が抽出された。「ショートステイが予約ではなく、いつでも気軽に利用できればなあ。重度の認知症の人を預かってくれるショートステイがなかなかない」等、という生データより、サブカテゴリーとして『介護保険制度の充実をして欲しい』が抽出された。

【患者の交流の場拡充の必要性】では、「早期の人たちが気兼ねなく集まり訓練できる場所がほしいです」等、という生データより、サブカテゴリーとして『患者が訓練できる場が欲しい』が抽出された。また、「介護の度合いの同じ位の人と交流ができれば毎日が少しでも楽しんだ人生が送られるのではないのでしょうか」等、という生データより、サブカテゴリーとして『患者交流できる場が欲しい』が抽出された。

【認知症の啓蒙活動充実の必要性】では、「もっとわかりやすい制度についての説明のようなものがあればと思います」や「はじめ、このことについて、無知な人が多く…」等、という生データより、サブカテゴリーとして『認知症理解への啓発が必要』が抽出された。「地区で認知症の勉強会のようなことができたかなと思います」「地域の人達への啓発を推進する必要がある」等、という生データよりサブカテゴリーとして『地区で認知症の勉強会を開いて欲しい』が抽出された。「介護される側も、介護する側も認知症について、正しく理解していない事、又、認知症自体“恥”という傾向があること。（両者に）正しく認知症を理解させることを教育の中に組み入れる必要があると思う、小学生から」等、という生データより、サブカテゴリーとして『学校での認知症教育の必要性』が抽出された。

【認知症や介護制度に対する自分の知識不足】では、「介護を始めたとき、認知症の事を知らなすぎた為、“最悪の対応”をしていました。もう少し早く勉強しておけば、本人に寄り添う介護ができたかと反省しています」等、という生データより、サブカテゴリーとして『知識不足を反省している』が抽出された。「デイサービスやショートステイが予約制だったこと、グループホームのこと、特養のこと…その時になって、初めて内容がわかったので、知識は早くからあった方がよいと思う」等、という生データより、サブカテゴリーとして『認知症介護が始まる前から知識は必要』が抽出された。「医療制度については良く分かりません。これから勉強しようと思っています」等、という生データより、サブカテゴリーとして『制度がわからないので勉強したい』が抽出された。

【金銭的負担の大きさ】では、「経済面は厳しく、高齢者にとって将来の生活は全くの不安の気持ちでいっぱい」等、という生データより、サブカテゴリーとして『経済的に厳しく将来が不安』が抽出された。「1反の農地を売っても10ヵ月の入所費用にしかならない状態です」等、という生データより、サブカテゴリーとして『サービスの利用料金が安い』が抽出された。「デイサービス等の料金がもう少し安ければ助かる」「介護負担（精神的、金銭的）が重い」等、という生データより、サブカテゴリーとして『施設利用料金を安くして欲しい』が抽出された。

【周囲の協力の必要性】では、「発症以来、必要のある方面には、事情を話して協力を求めた…協力してくれた人はたくさんあり、感謝している」等、という生デー

タより、サブカテゴリーとして『周囲の人の協力に感謝している』が抽出された。また、「初めての介護は未知の世界であり、孤立しないで、専門の方々、家族の会などに入りコミュニケーションが必要でした」等、という生データより、サブカテゴリーとして『他者とのコミュニケーションが必要』が抽出された。

考 察

制度の活用と課題に関しては、介護保険を活用することで家族介護者の負担を無理のないものにし、介護負担の軽減を図れているため制度に満足している、とする考え方と、逆に現在の認知症高齢者支援に関する制度に不満を感じており、今後の介護生活に関しても期待を持ってなくなっているとする両極の認識が覗いている。しかし、課題はあっても、制度の活用には一定の意味を見出している。家族介護者は、現代社会において今後高齢化が進行してくため、認知症高齢者を含めた高齢者を取り巻く環境に対し不安を高めていると考えられる。現在の制度を利用することで初めてその問題点に気付いたと思われる。

患者の交流の場拡充については、家族介護者は認知症高齢者が認知症の進行を少しでも遅らせ、生活の質を向上させ楽しく充実した人生を送ってほしいという願いを持っていることが示唆された。山上ら⁶⁾が行った研究によると、週に1回の脳活性化リハビリテーションで、参加者同士やスタッフとのコミュニケーションを通し認知症高齢者の意欲や生きがいの創出、進行予防が行えたと述べている。また、脳活性化リハビリテーションを通し家族同士の交流が生まれていることから、患者の交流の場拡充を実現させることは進行を遅らせる、家族の介護負担を減らすという意味でも有効であると考えられる。また、大森ら⁷⁾は、家族介護者はつどいに参加することで人との出会いがあり、気持ちが通い合っていることが実感できているとの語りから、つどいには自己と同様の介護経験をもつ介護者である良き理解者の存在があるため、親和欲求を満たすための場となっていると述べている。

認知症の啓蒙活動では、認知症教育を含めた啓蒙活動の必要性に気付いていた。また、「地域の人たちへの啓蒙を推進する必要がある」という生データより、家族介護者は介護経験を通して、知識がないことにより適切な介護ができなかったことや、認知症に対し無知な人から

の協力が得られなかったことから、認知症についての知識を家族介護者だけでなく地域の人々に対しても普及していく必要性を感じていると考えられる。また、認知症に対する偏見をなくすためにも幼い頃から認知症をより身近なものとして捉えられるような教育を進める必要性も感じていることが示唆された。

認知症や介護制度に対する自分の知識不足では、自分に知識が不足していることを後悔していた。認知症高齢者の家族介護者のニーズ尺度開発の研究⁸⁾において、下位因子の一つに情報ニーズ因子が提示され、介護における情報の重要性が報告されている。認知症高齢者の家族介護者のニーズや認知症、そして制度に対する知識がもっと早くからあれば、認知症の症状に適切な対応ができ、制度も有効活用が可能となる。一方、家族の会が主催するつどい等の当事者同士のピアカウンセリング的な場で、実情を吐露することや、またそれに対する意見や知識、情報を得ることで、状況を共有することができる⁹⁾。そのことで、より深い介護へと進むべく気持ちの適応を示すことも可能となる¹⁰⁾。それらは、認知症高齢者や家族介護者にとってより負担の軽い介護生活を送ることに繋がるものであると考えられる。

金銭的な面からは、家族介護者は、金銭的な負担感を少しでも軽減するような改善策を望んでいると考えられる。認知症は不可逆的な疾患であり、介護にも長期の時間をかける場合が多い為、金銭的負担も自然と大きいものとなる。金銭的負担は家族介護者の精神面にも大きく影響を及ぼし、今後の介護生活を送ることに希望を持ってなくなっている家族介護者の存在も考えられるため、早期の対応が必要であると考えられる。

周囲の協力の必要性では、周囲の人の協力に意味を持たせた表現をしていた。また、知識がなく未知の世界であった認知症高齢者について、専門家や家族会により知識を得ることの必要性も示唆された。ハード面からのサポート体制は重要であるが、それ以上に、フォーマルまたはインフォーマルなソフト面からのサポートが重要となる。家族介護者は、情報や知識面からの協力を心強く感じ、そのことが介護上の自己の役割機能を支えている¹¹⁾。その結果、感謝の気持ちを持つことができ、自己の意識の拡大、周囲との人間関係の構築に繋がる。一人で介護を背負ってしまうのではなく家族や近所の協力を得ることが支えとなり、日々の介護への意欲につながっているのではないかと考えられる。また、そのことにより、周囲の人々が認知症に対する知識を持つことの必要

性も示唆された。

家族介護者自身の知識不足による後悔や社会の認知症に対する理解不足による苦悩，周囲の協力による感謝の思いや金銭的負担感を経験したことにより，家族介護者は，地区や学校での認知症の啓蒙活動の充実や制度の改善，患者の交流の場の拡充を望んでいることがわかった。また，制度の改善を求める中でも，『介護保険はありがたい助かる』など今ある制度に満足しているという気付きも見られた。

ま と め

本研究から，家族介護者は，満足して介護制度を活用している反面，介護経験を通して制度の課題にも気付いていることがわかった。また，自己の介護を振り返ったときの知識不足の痛感から，認知症の啓蒙活動の充実や交流の場の重要性に気付いていた。さらに，介護そのものには金銭的負担や周囲の協力が大きいことにも気付いていた。

今後の課題として，データの飽和に向けて，同様の条件における対象者を増やし，研究の蓄積をすることで，一般化へとつなげていきたい。

文 献

- 1) 厚生統計協会編：国民衛生の動向．初版，厚生統計協会，100-117，2007.
- 2) 松本啓子，名越恵美：認知症高齢者の家族介護者の医療ニーズと精神的健康との関係，看護・保健科学研究誌，8(1)，249-255，2009.
- 3) Matsumoto K., Takai K., Kirino M., et al: Measurement and the Criterion-Related Validity of Care-Related Needs of Family Members Caring for Demented Elderly Patients at Home, Kawasaki Journal of Medical Welfare 12(1)，29-36，2006.
- 4) 松本啓子，清田玲子：認知症高齢者の家族介護者の介護に対する思いー将来受けるであろう介護に対する思いに着目してー，川崎医療福祉学会誌，18(1)，239-243，2008.
- 5) K. krippendorff 著，三上俊治，椎野信雄，橋本良明訳：メッセージ分析の手法「内容分析」への招待．第1版，勁草書房，2001.
- 6) 山上徹也，細井順子，妹尾陽子 他：脳活性化リハビリテーションによる認知症の進行予防の可能性ー長期介入例の検討ー，老年精神医学雑誌，18(10)，1105-1112，2007.
- 7) 大森恵理子，木村里世，佐野由季 他：認知症高齢者をかかえる家族介護者の「つどい」への参加の意味ー家族介護者のニーズに着目してー．第37回地域看護，240-242，2007.
- 8) 松本啓子，高井研一，中嶋和夫：認知症高齢者を持つ家族介護者のニーズ測定，家族看護研究，11(2)，102，2005.
- 9) 松村ちづか，川越博美：在宅痴呆性老人家族介護者にとっての家族会の意味ー家族介護者の人生観・介護観・家族会へのニーズとの関連ー，聖路加看護学会誌，5(1)，1-8，2001.
- 10) 佐分厚子，黒木保博：家族介護者の家族会参加による介護への適モデル，日保学誌，10(2)，80-88，2007.
- 11) 廣瀬恭子，山廣恵美子，矢野秀美 他：終末期患者を看取った介護者の自己成長を考えるーロイ適応看護モデルからの考察ー．第37回地域看護，100-102，2006.

Awareness of family caregivers of elderly dementia patients residing at home

Keiko Matsumoto¹⁾ and Megumi Nagoshi²⁾

¹⁾Department of Health Science and Nursing, Kawasaki University of Medical Welfare, Okayama, Japan

²⁾Fukuyama Heisei University, Hiroshima, Japan

Abstract As indicated by the referring to family care givers as “second patients”, family members are known to be providing nursing care while bearing various latent burdens.

However, reports focusing on events that occur in the care setting are still only in the initial stages. Therefore, a qualitative factor exploratory analysis was conducted by focusing on findings based on the experiences of caregivers in order to identify thoughts and impressions obtained through the experience of providing care of family members caring for elderly dementia patients. The analysis was targeted at 70 members of the “A Prefecture Branch of a Dementia Patient and Family Member Group” from whom replies were obtained to a semi-structured questionnaire. As a result, 6 categories were extracted from the replies, consisting of “use of programs”, “enhancement of opportunities for exchanges among patients”, “substantiation of dementia educational activities”, “regrets over lack of knowledge”, “monetary burden” and “cooperation of others”. As a result of analyzing and discussing the thoughts of family members from the viewpoint of findings obtained through the providing of care, it was found that the thoughts of family members regarding dementia programs are complex, and consist of numerous thoughts, including those indicating satisfaction as well as calling for improvements. However, the respondents also felt a need to place importance on social understanding, including an awareness of their own lack of knowledge. On the other hand, the respondents were also aware of the importance of providing greater opportunities for exchanges among patients themselves. In addition, although the providing of care is also associated with a considerable financial burden, it was also found that obtaining the understanding and cooperation of others in the community is also important.

Key words : elderly dementia patients , residing at home, family caregivers, awareness